

科目区分：小学校教科科目

授業科目名：初等音楽

担当教員：横山詔八・岸啓子・田邊隆・石塚真子・木村勢津

理論と実践の一体化を目指した学び

1. 授業の目的

小学校音楽科に必要な「表現」「鑑賞」領域について、学習指導に必要な基礎的菱木と技術を習得することを目的としている。

2. 授業の概要

「音楽史・理論」「日本の音・音楽」「伴奏」「アンサンブル」「歌唱」の5つの視点から理論・実技実践を中心に授業を展開した。授業は、岸啓子、石塚真子、横山詔八、田邊隆、木村勢津(筆者)がそれぞれの専門領域の立場から授業を担当し、各3回の配分で授業を展開した。

本授業研究報告書は、筆者が担当した「歌唱」領域(第13回～第15回)について報告するものとする。

授業登録者数は、学校教育教員養成課程68名、障害児教育教員養成課程17名、生活健康課程2名、情報文化課程1名、院生1名、科目等履修生1名、総数90名で、単位取得者は76名であった。

3. 理論と実践の一体化を目指した学び

本授業は、学校教育における合唱等の体験を有してるが、専門的に学んだ経験のない受講者、すなわち音楽初心者を対象して実施される。また、多人数かつ3回という制約された授業時間の中で、受講生が、学校教育現場で教えるに当たり、歌唱の基礎基本を効率的に学び実践できるかという点に重点を置き、授業を構築した。歌唱の基本的技術を習得するためには、訓練が必要であるが、3週間という短期間に技術の定着が望めるものではない。そこで、声のどるしくみ・変声・声域・声種・歌唱形態・表現の意義等、歌唱指導に当たって、重要と思われるキーワードを厳選し、キーワードを中心に理論の説明を行うと同時に歌唱演習やVTR等の鑑賞を通じて、具体的に

音楽教育教育講座・木村 勢津
体験し、理論と実践を一体化する授業形態を試みた。

授業の実施にあたって、毎回、用語の説明や授業内容を記した資料を配布し、資料に沿って概説し、その後、演習を行うという方式を取った。

また、最終回の授業では、第1回目の授業で予めグループ分けしておいた班により、課題曲を演奏する時間を設けた。これは、歌唱に関する理論の実践に加え、声を用いて表現することの意義、すなわち表現を体感するための試みで、3週間に各グループが話し合いや練習を通して、自分たちらしさ(個性)を生かした演奏について考察できる場を設けた。

4. 授業への参加状況

全授業は3回のうち、3回の欠席者は、11名(全員単位未習得者)、2回0名、1回3名であった。平均出席率は86.7%、3回欠席者は全員、授業者担当の授業開始時に試験受講資格の規定出席回数に達しておらず、この11名を除くと、出席率は98.8%となった。

5. 授業評価

受講生の授業における興味関心を知る学習状況(理解度・到達度)、疑問点、感想等を記するフィードバックシートの提出を全授業において課した。

設問は、1回のワークシートでキーワードを中心に4～5項目とした。評価は、明確に自分の理解度(到達度)を示すために、「普通」の項目を設定せず、1. 良く理解出来た(できた)、2. ほぼ理解できた、3. あまり理解できない、4. 理解できないの4段階とした。自由記述では、その設問に沿った感想が書かれる傾向が見られた。

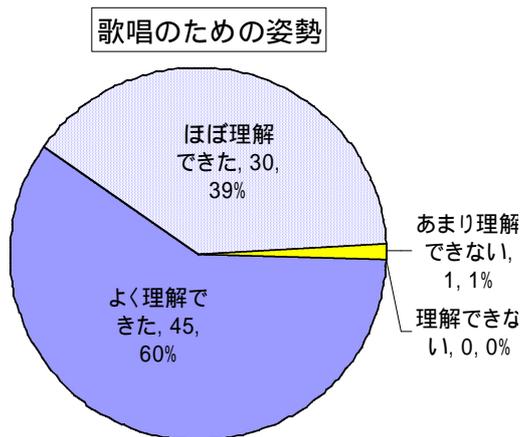
以下、各授業におけるキーワードと代表

的設問とそれに関連する質問・感想を記す
る。

第 13 回 授業キーワード

声のでるしくみ
歌唱のための姿勢
呼吸
文部省唱歌

設問「歌唱のための姿勢」の理解度



< 感想 >

普段の自分の姿勢の悪さに気づきました。(他 17 名)
姿勢を正しくすると気分もすっきりしたような気分して、とても楽しく歌えた。呼吸、姿勢、声のでるしくみ等基本的なことから教えてもらったので、これから歌っていく時に意識したい。
歌うための土台作りとして姿勢を一つずつ確認しました。～(中略)自分で声を出していて、とても気持ちよく感じました。自分の姿勢が変わったのがわかった。自分で気づいていなくても体が歌う状態になっている時となっていない時では、声の出方も大きく変わってくると思った。歌唱のための姿勢、呼吸などちょっと難しかったです。
姿勢によって発声が違ってくるので、姿勢はとても大事ななと思いました。歌う時の姿勢は、きちんとできていると声の質とかもかわってくるのだなと感じました。
元々合唱団にいて、歌のしくみや声のしくみはある程度知っていたので、理論はわかりやすかった。
歌うときの姿勢を実際にやってみて、ず

っと維持していくのはとても大変だなあ
と感じました。

姿勢や声の出し方など、言われていることはわかりましたが、自分できちんとできているかどうかが不安です。

出席者 76 名全員から回答を得た。よく理解できた 45 名は、全体の 59.2 % となり、ほぼ理解できた 30 名を加えると理解できたと感じている者は、98.7 % となる。

また、歌唱のための正しい姿勢を具体的に演習を行い、実際の歌唱を経験することにより、感想にも書かれているように、自分の問題点に気づいたり、姿勢を意識することの重要性を知る糸口となっている。

第 14 回 授業キーワード

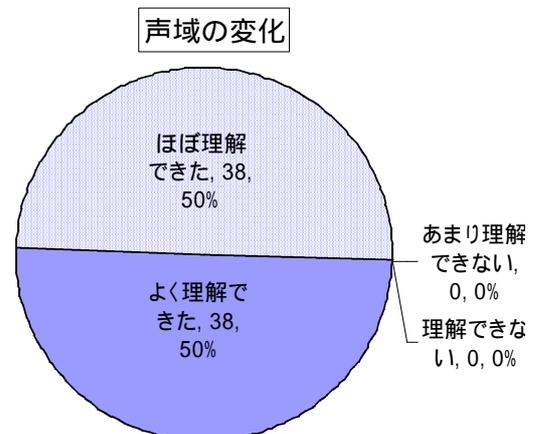
声域の変化
声種
声による演奏の形態
斉唱 輪唱 合唱

(、 、 は 声による演奏の形態の設問に対して、実際の演習でよく理解して歌えたかどうかを設問)

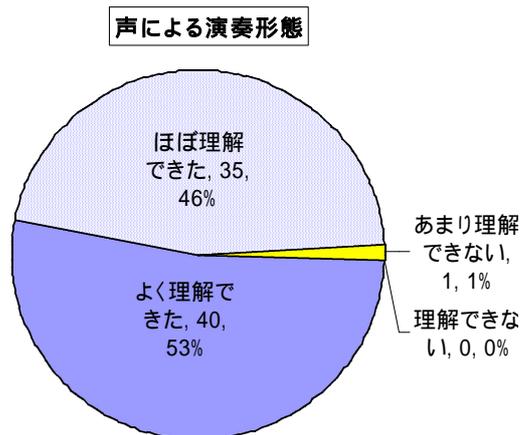
第 14 回の授業においては、授業者は 2 つの観点を持ち授業に臨んだ。

第 1 の観点は、変声に関する知識と理解を深め、指導法に留意できる姿勢を養うこと。第 2 の観点として、声による演奏形態の理解とその歌唱形態を演習を通じて体感出来るということである。

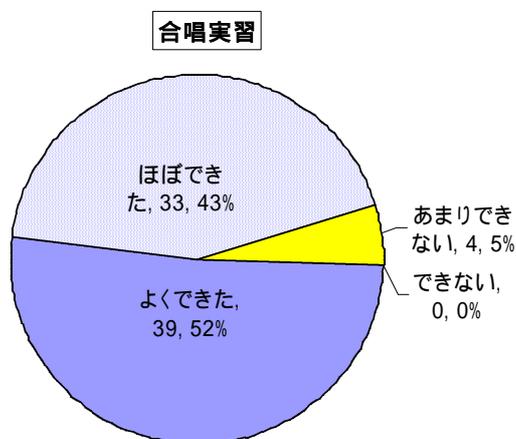
設問「声域の変化」の理解度



設問「声による演奏形態」の理解度



設問「合唱実習」の到達度



< 感想 >

声域や声種について詳しく分かり良かった。
 あいまいだった声域と演奏形態の知識が明らかになった。
 女の変声は初めて聞いたが、確かに小学生の時、声が出づらい時期があった。(女性、他変声について同様の表記 15名)
 声帯が変化によって、声の高さが変わることが、ギターやピアノのしくみと同じだと思った。
 嗶声や声種についてもとく見直しをして復習をしておきたいと思います。
 変声における留意点や合唱の形態など大変参考になりました。
 音楽を教える時、子供達の声帯の変化に注意しなくてはならないと思いました。
 色々な歌をパートを替えて歌ってみて、輪唱や合唱の体験もでき、楽しみながら学ぶことができました。

実際に歌ってみると理解しやすく、楽しかった。
 風邪をひいて、のどと鼻の調子が悪く、少し辛い部分がありましたが、徐々に声が出るようになると楽しかった。

第 14 回の授業も出席者全員 76 名から回答を得た。
 声域の変化に関する理解度は、授業者の予想を超え、理解できたと回答する者が 50 %、ほぼ理解できたと回答した者を加えると 100 % の回答を得た。これは、事前に配布した年齢による声域の変化に関する資料等、資料の充実と附属小学校のコーラス部の演奏や受講者の斉唱、合唱等の演習により、理解を深めたものと推察される。

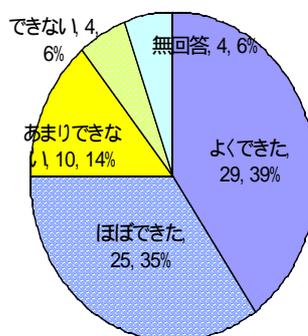
一方、声の演奏形態は、ほぼ理解できたと回答した学生も加えると 99 % の学生が理解できたことになるが、実際の合唱演習になると到達度は下がる。これは、風邪等により身体的コンディションが整わない学生がいたこと。また、自己の到達度に個人差があることが、感想文から読み取れた。

第 15 回 授業キーワード

- 発声練習の効用
- 発表の準備
- 演奏の自己評価
- 演奏評価

(、 は試験として行われたグループ発表の事前準備と自己評価、 は他のグループの発表に対する評価)

演奏発表の自己評価



< 感想 >

楽しかったです。みんなで 1 つのものを作り上げることって、素晴らしいなと思います。

「歌う」という概念が少し変わってきた。足踏みをしながらや、グループ発表のように手をつないだり、手をたたきながらなど、声を出すだけでなく、身体全体をつかってやる楽しさがわかった。

私はおんちなので、音楽の授業の歌はあまり好きでなかったけど、今回は思い切り楽しく歌えた気がする。

歌を歌うことはキライではないし、でもすごく好きというわけではありませんでした。というのも、私は笑顔で楽しくということができなかつたからです。でも「先生が教師ははサービス業！」とおっしゃったように笑顔になるように身体を動かしたり、足踏みしたりしたら、自然と楽しいと思えるようになりました。

今日は、自分の中で精一杯声を出して歌うことができました。とても気持ちよかつたし、みんなが頑張っている雰囲気の中にいると自然に自分も頑張ろうという気になれます。教師はあらゆるところで、このような雰囲気になれるように支援しなければならぬとこの授業をとおして学びました。

音だけでなく、“広がり”“新たなものを生み出す”ことができる音楽の力はすごいなと思いました。

練習不足で、満足な演奏ができなかつた。くやしい。

グループ発表については、約5%の学生が無回答であった。全3回に実施したワークシートのすべての項目において、無回答を得たのはこの項目のみである。また、15%の受講生が、満足のいく演奏ができなかつたと回答した点にも着目したい。授業自体は、感想文から推し量る限り、歌うこと、共に音楽を創ることを楽しいと体感してくれる傾向にあることがわかつた。



<グループ演奏発表風景>

6. 今後の課題

フィードバックシートは、受講生の理解度を知るばかりでなく、興味関心の傾向を知るうえでも重要な資料となり、次回授業の展開を考えるための材料となった。

授業開始時と終了時のアンケート調査を行うことにより、授業全体の流れの中で、学生の理解度や学習傾向が明確となり、次回の授業構成に役立つと思われる。アンケートの実施方法および内容については、今後多いに検討すべき点があると考えている。

自己の演奏に対して、無回答とした学生の気持ちを押し量り、対応できる授業展開を考えたい。

更に、多人数受講生のため、個別指導が叶わず、個々の技術の向上や歌唱上の疑問にきめ細かく対応できていない。今後、この点について、改善策を講じなければならぬと痛感した。